

シンポジウム「いま、現代中国を考える」実施報告

去る3月10日(日)午後1時から5時まで、東京・市ガ谷のアルカディア市ヶ谷で本会(中国事情研究会)主催の「いま、現代中国を考える」をテーマとするシンポジウムが開かれた(共催: 科研基盤(A)「ジェンダー視点に立つ「新しい世界史」の構想と「市民教養」としての構築・発信」(研究分担者: 日本大学文理学部・小浜正子教授))。シンポジウムには、学会員を始め中国に関心を持つ一般聴衆52名が参加した。

シンポジウムは、山本忠士中国事情研究会代表の挨拶から始まり、次いで本会理事の高綱博文日本大学教授から「中国問題が世界的に大きな影響を与えている現在、中国を考えることは日本にとっても不可欠のことである。私たちは<現代中国の実像>を知り、<現代中国>としっかり向き合う必要がある」との開催趣旨が説明された。

第一部の基調報告では、現代中国研究者として注目されている4人の講師が次のような報告を行った。報告①では及川淳子中央大学准教授による「中国の社会変動一言論・ジェンダー・普遍的価値」が、報告②では近藤大介講談社特別編集委員・現代ビジネスコラムニストが「習近平と米中衝突」を、報告③では安江伸夫テレビ朝日北京支局長が「中国の対日政策の法則」を、報告④では吉村剛史産経新聞広島総局長・前台北支局長が「中国の台湾政策と台湾社会の反応」について、報告があった。

第二部のパネルディスカッションは、日本大学講師の堀井弘一郎氏の司会によって進められた。内容は、4基調報告に対して他の報告者がそれぞれコメントし、さらにそれに基づいて討論を行い内容を深めた。特に、日中問題では情報があふれているのに、将来を担う青年学生の交流では、日本から中国への留学が少なくなっていることなど日本の内向き傾向に懸念が表明された。また、中国の民衆は政治と関係のないところで活動の領域を広げており、日米と同じ民主主義の尺度では測れないのではないかと。日本への中国人観光客の増加によって、日本に良い印象を持つ人が増えている傾向はあるが、同時にQRコード利用によるキャッシュレス決済など、日本のIT環境が遅れていることを実感し、中国の良い点にも気が付くことにもなっているとの指摘があった。

その後、フロアの参加者との質疑応答に移り、米中関係、日中関係、中台関係など幅広い両国の問題について活発な論議が交わされた。

特に、4名のパネリストは、第一線で活躍する研究者・ジャーナリストであり、フロアからの多方面にわたる質問に対して、該博な最新情報に基づいた見解が示され、5時過ぎ

に終了。なお、今シンポジウムの記録刊行についても検討中であることが報告された。

終了後は「アルカディア市ヶ谷」のレストランで懇親会が開かれた。(山本記)

